

世話人所感（2021年12月上旬）

2021年が終わろうとしている。

思い返せば2020年の始まりとともに徐々に不気味な姿を顕してきた新型コロナウイルスに、その後の長きに亘り全人類が翻弄されることになるとは知る由もなかった。

コロナ禍で失われたものは人々の貴重な命を始めとして、遠方や入院・入所中の家族に会えないこと、移動や式典、会食会話の制限など、数えればきりが無い。一方で「ニューノーマル」とか「with コロナ、after コロナ」など、得たものまでとは言わないが様々な局面で普通が普通でなくなり、あって当たり前と思っていたものが、実は不要であることに気づいてしまった日々でもある。

ところで看護職として、臨床現場や看護教育に関わる困難や課題はここでは置いておく。ずっと気になっている看護や医療職への外からの人々の視線や扱いについて、今回は取り上げてみたい。

今回のコロナ禍で“医療職へ感謝”という言葉をしきりに聞いた。職種に対する純粋なりスペクトであることを疑いはしないが、どうもその裏に「感謝します、あなた方が大変なことをしてくれているので私たちは助かります（でも私はやりませんけど）」というメッセージを受け取ってしまうのは私の捻くれた根性の故か。そもそも職業（特に専門職）に従事するものは感謝を欲しているのだろうか。専門職としての誇りと責任感、使命感を改めて自覚するまでもなく働く人々にとって恐らく感謝は不要なのだ。沢山の感謝はその職種の当事者というより、それを取り巻く人々の自発的ではあってもある種の後ろめたさの代償行動のように思えてならない。例えば巨額の弁護士報酬や医師の自由診療など高額の支払いをしてなおかつ感謝を捧げるのはどのような状況なのであろうか。

つまり、“誤解を怖れず”という常套句すらもはや使うつもりもなく、「感謝ではなく正当かつ適正な評価をして欲しい」のである。感染者、濃厚接触者のケア、ワクチン接種、看護職の手当が医師の3分の1なのは適正なのか。首相が鳴り物入りとした看護職給与の増額1%（月額4000円）は正当なのであろうか。

当未来塾では、看護を取り巻く様々な事象や出来事を取り上げ、独自の視点で発信している。ブルーインパルス飛行を見て、満たされる人々の思いとは何なのだろう。

岸田首相は、就任直後の医療関係者との車座対話で、「分配施策4本柱」の一つとして看護職の処遇改善を掲げた。職能団体との折衝もあり全看護職を対象とした結果の1%（来年10月以降は補正予算とは別財源の見通しとのこと）であることは承知しているが、それでも1%の根拠も不明だ（過去の春闘相場を参考にした程度で明確な根拠はないらしい）。

議員の月額100万円の文書交通費にいちいち文句を言うのも何だかなあと感じていたが、これは本気で声を上げるべき問題なのかもしれない。

今回の世話人所感は黒さ満載である。

井上智子